身体という受動性

細見和之

構造理解 次の空欄にあてはまる語句を本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

第一段（一四一・初め～一四二・3）

人間は絶えず外部から ¬①［　　］」を取り込まなければならないので、②［　　］を他者性との関係で捉えるとき、身体や生命を無視できない。それは ¬③［　　］」を特徴的に示すからである。

第二段（一四二・4～一四四・3）

少年と父の対話を軸にした散文詩『I was born』の中の少年は、生まれることが ¬④［　　］」である理由をふと了解する。父は、短命である蜉蝣の雌の体が卵で充満していることに、⑤［　　］が咽喉もとまでこみあげているように見える、という話を語る。少年の母は少年を「生み落として」すぐに死んだ。その母の胎内をふさいでいた自分、というイメージが少年の脳裏に焼きつけられる。

第三段（一四四・4～一四五・9）

身体や生命を思うとき、この詩が思い浮かぶのは鮮烈なイメージを喚起するからだ。子供は母親の生命を圧迫して育つ ¬⑥［　　］」である。「母」は、自分自身の生命のイメージとしても浮かんでくる。自分では⑦［　　］生命が、自分自身の身体を圧迫するように充塡されているという意味において、身体と意識との関係は「受動性」を示しており、しかも私たちは ¬⑧［　　］」を離れて存在しえないのである。

第四段（一四五・10～一四六・8）

圧迫する生命とは⑨［　　］のことで、しばしば意識を裏切る［⑨　　］は ¬⑩［　　］」の相貌を帯びる。［⑨　　］が「自己」なのか「他者」なのか、⑪［　　］としか答えようがなく、私たちは日常的に都合よく使い分けている。

語句理解 次の各問いにそれぞれ答えなさい。

1 傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

(1) 健康を維持する。［　　］

(2) 徴兵を忌避する。［　　］

(3) 考えが脳裏にひらめく。［　　］

(4) 多様な相貌を有する。［　　］

2 傍線部の熟語を正しい漢字を使って書き改めなさい。

(1) 寄妙な言い方。［　　］

(2) 個有の存在感。［　　］

3 次の言葉の意味を書きなさい。

(1) 契機［　　］

(2) 理不尽［　　］

(3) 庇護［　　］

内容理解 次の各問いにそれぞれ答えなさい。

第一段（一四一・初め～一四二・3）

1 「アイデンティティーを他者性との関係で捉えるとき、この身体という次元を無視することはできない」（一四一・2～3）について、

(1) 「アイデンティティーを他者性との関係で捉える」とはどのようなことか。次の空欄にあてはまる語句を後ろの語群からそれぞれ選びなさい。

自分の①［　　］にあるものが持っている②［　　］との関係によって、③［　　］というものがどういう④［　　］であるのかを自己認識するということ。

ア 身体　イ 生命　ウ 内部　エ 外部
オ 存在　カ 性質　キ 自分　ク 他者

(2) この部分の理由にあたる部分を「～から。」に続く形で本文中から抜き出して初めと終わりの五字を答えなさい。

［　　］～［　　］から。

2 「逆説」（一四一・6）とは、ここではどのようなことを意味しているか。適切なものを次から選びなさい。

ア 「私」と「他者」とは、対立する概念であるのに、その「私」が、「他者」の存在なしには維持しえないということ。

イ 「私」と「他者」とは、言葉の上では、全く異なる概念を表しているということ。

ウ 「アイデンティティー」は、身体という次元を無視して考えることはできないのだということ。

エ 「私」と「他者」とは、対立する言葉のように見えるが、実は同じ意味を表す言葉であるということ。

［　　］

3 「他者を取り込むということは……他者化されることでもある。」（一四一・6～7）とあるが、この部分を端的に言い換えている部分を本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

［　　］

4 「僕らの存在につきまとう、ある『受動性』」（一四二・2）について説明した次の文の空欄にあてはまる語句を本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

僕らは ¬①［　　］」という存在を、常に ¬②［　　］」からの影響を受けて確かめているということ。

第二段（一四二・4～一四四・3）

5 「この発見」（一四三・1）の内容を、「～という発見。」に続く形で詩中の語句を用いて簡潔に説明しなさい。

［　　］という発見。

6 「思いがけないことに、『蜉蝣』の話をゆっくりと語って聞かせる。」（一四三・3～4）とあるが、このときの少年と父との気持ちのずれを説明した次の文の空欄にあてはまる語句を後ろの語群からそれぞれ選びなさい。

少年が言った、人間は①［　　］ではなく、生まれさせられるのだという言葉は、単なる②［　　］上の③［　　］から発せられたものにすぎなかったのだが、父は、息子の言葉を単に④［　　］なものとして受け取り切れず、自らの生について⑤［　　］に言い募るような響きをもって捉えられた。

ア　母親の意志　　イ　自分の意志　　ウ　無邪気　　エ　理不尽
オ　身体　　カ　文法　　キ　発見　　ク　哲学

7 吉野弘の詩中の「卵だけは腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方にまで及んでいる。」（一四三・10～11）について、

(1) 父が語ったこの言葉から、少年が連想した映像について述べた部分を本文中から三十字程度で抜き出して初めと終わりの五字を答えなさい。

［　　］～［　　］

(2) 「腹の中にぎっしり充満していて」る「卵」はどのようなものであるかを述べた部分を本文中から十二字で抜き出しなさい。

［　　］

第三段（一四四・4～一四五・9）

8 「生まれ落ちた者はおしなべて……潜在的な『加害者』なのである。」（一四四・14～15）のはなぜか。適切なものを次から選びなさい。

ア　人間はみな、この世に生まれてなんらかの罪を犯しているから。
イ　人間はみな、他者とのかかわりの中で生き続けてゆくものだから。
ウ　人間はみな、母親の生命を圧迫して生まれ育つものであるから。
エ　人間はみな、母親の手を煩わさずに生まれ育つものであるから。

［　　］

9 「そういう次元」（一四四・16）が指している内容を「～という次元。」に続く形で本文中から抜き出して初めと終わりの五字を答えなさい。

［　　］～［　　］という次元。

10 「単に子を宿した母親がそうというのではなく」（一四五・1～2）の「そう」はどのようなことを指すか。「～こと。」に続く形で本文中から抜き出しなさい。

［　　］こと。

11 「僕ら自身がそれぞれ、いわば生命という卵を『咽喉もとまでこみあげ』させている」（一四五・2～3）について、

(1) この部分の意味をまとめた次の図の空欄にあてはまる語句を本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

僕ら自身
充塡 ←……制御できない①［　　］が②［　　］するように。
僕ら自身の③［　　］

(2) 「こみあげさせている」という表現が、「充塡されている」と言い換えられている理由をまとめた次の文の空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

人間の存在の［　　］を明確にするため。

第四段（一四五・10～一四六・8）

12 「自分自身の生命（身体）を同じ生命（卵）が圧迫している」（一四五・10）の意味をまとめた次の図の空欄にあてはまる語句を本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

例
空腹 ＝裏切る⬇自分自身の身体
排泄の欲求 ＝襲う⬇もう死んでしまいたいという③［　　］
← ④［　　］の相貌

主題理解

1 「僕らにとって『自己』なのだろうか『他者』なのだろうか」（一四六・3～4）という問いの答えが「決定不能」（一四六・5）なのはなぜか。その理由をまとめた次の文のア・イから適切な方をそれぞれ選び説明文を完成させなさい。

「欲望」・「無意識」も①｛ア　自分／イ　他人｝の心の中に確かに存在するものであるという意味においては②｛ア　「自己」／イ　「他者」｝だと言えるが、その「欲望」・「無意識」は③｛ア　自分／イ　他者｝では制御できず、はっきりとした意識に反する結果を④｛ア　自分／イ　他者｝の身体にもたらすこともあるという点では⑤｛ア　「自己」／イ　「他者」｝であるとも言えるから。

①［　　］
②［　　］
③［　　］
④［　　］
⑤［　　］